

ノコギリガザミ 中間育成指導

多和田 真 周

1. 目的

中間育成技術全般の指導

2. 対象

中城沿岸漁業振興推進協議会
(沖縄市漁協 南原漁協)

3. 協力機関

水産振興課・水産試験場・日裁協八重山事業場
傘下市町村

4. 経過

8月16日にノコギリガザミ種苗受け入れ準備会を沖縄市漁協会議室において開催、中間育成方法、輸送方法、放流場所その他について協議した。

8月21日にノコギリガザミ中間育成用囲い網設置作業を沖縄市総合運動公園横湿地帯において約15名により杭打ち、網張り、食害生物の除去作業を実施し、8月22日に日本栽培漁業協会八重山事業場において活魚水槽を掲載したトラックにノコギリガザミの稚ガニを収容、定期船による海上輸送後、8月23日の午前中に中間育成用囲い網を設置してある沖縄市総合運動公園横湿地帯まで陸上輸送、中間育成用囲い網内へノコギリガザミ種苗約3万尾放養した。

飼育管理は漁協職員や刺し網グループが交代で行い、放流するまで中間育成期間(約37日間)給餌作業等が実施された。

直接放流分については、沖縄市漁協地先泡瀬橋の下流域付近と南原漁港北側干潟域へそれぞれ1万匹放流した。

9月29日には沖縄市総合運動公園横湿地帯放養群について放流する前に歩留まりと甲幅長を測定した。その結果、甲幅長は平均25mm、生息密度については1平方m×5ヶ所の坪刈りを実施したが、いずれも0尾であった。しかし、ノコギリガザミが全くいないということではなく、囲い網周辺付近には目視可能な稚ガニも確認できたことから囲い網内の生息密度分布の片寄りが考えられる。測定後は直ちに、囲い網を撤去してその場で放流を実施した。

中間育成状況は測定結果が示すように歩留まり的には悪い。要因としては形式的に囲い網は設置したものの食害魚の除去が完全に排除出来てなかった事、囲い網外への逃亡、逸散、大型鳥類による食害等が考えられる。

中間育成中の技術的な改善点としては囲い網の底と天井に食害防止ネットを追加し、囲い網内に共食い防止用シェルターを投入する必要があると思われる。



沖縄市泡瀬
沖縄県総合運動公園東側
ノコギリガザミ囲い網中間育成場



勝連町宇南風原
南原漁港北側干潟における
ノコギリガザミ稚ガニの直接放流作業